

固有名詞の普通名詞化語彙小考

——随想風に、袖珍辞書風に——続続^①

森 田 孟

玄翁 [源応] と呼ばれる鉄製の鎚がある。「矢割」(石に穿った穴に鉄の楔を差し込んで玄翁で打ち割ること) や、「玄翁払い」(切り出した石材の形を整える際に、不用部分を玄翁で払い落とすこと) に用いる石工用と、「釘打ち」、「鑿叩き」、「木殺し」(和船の舳 [かわら=和船の船首から船尾まで通す船底材]、棚板など二枚以上の板を接ぎ合わせる場合、その接ぎ目に隙があかないように予め接ぎ目の面を金槌で叩き締めておく作業) などに使う大工用とが知られる。南北朝時代の曹洞宗の僧玄翁和尚 (諱は心昭、1326-96) が、これで〈殺生石〉を砕いたという伝説に由来する。

越後の人で、総持寺の峨山紹磧に師事し、伯耆国の退林寺、下野町の泉溪寺などの開山であるこの和尚が、下野国那須野が原の殺生石を打ち砕いた故事は、謡曲「殺生石」(日吉佐阿弥作といわれる能楽の五番目物、あるいは四番目物) に取材される。

殺生石とは、栃木県那須郡那須町の那須岳の寄生火山御段山東腹にある溶岩。この付近の硫気孔から有毒ガスが噴出して、そこに近づく蜂、蝶などの動物が多く死ぬところからの名称である。

伝説によれば、鳥羽天皇の寵姫玉藻前に化けた白狐が、安部泰成に正体を見破られ、三浦義明に射止められて石と化したものを、後深草天皇の時に件の玄翁和尚が杖で打って石の霊を成仏させたとされる。

玄翁なる金槌の一種の道具名(普通名詞)には、上述のような人名(固有名詞)とそれに纏わる〈物語〉が、背後に・内部に、付着し、沈んでいる。

英語には、**プラスキ** (Pulaski) [1924]^②なる道具がある。片側に斧の刃、反対側に鶴嘴のような刃の付いた斧である。これを考案した米国の森林警備員 E. C. Pulaski (1866-1931) の名に因む。人名が即、普通名詞になった。

サターズミル (Sutter's Mill) [サターの選鉱所] は、米国カリフォルニア州中部にある州都サクラメント北東方の或る地名である。その所有者が、ドイツ生れの米国の辺境開拓者サター (John Augustus Sutter, 1803-80) であったところからの名称だが、この近くで1848年に金が発見され、翌1849年のゴールド・ラッシュ (Gold rush) を引き起したことで有名になった。この、一攫千金を夢みて1849年にどっと California に殺到した人々は“Forty-Niner” (フォーティナイナー [49年びと]) と呼ばれ、この語は一般に、「新発見の鉱山などに押しかける人」[1853] の意となる。「ゴールド・ラッシュ」と言えば、チャップリン (Sir Charles Spencer Chaplin, 1889-1977) 監督・主演の米国映画 *The Gold Rush* 『黄金狂時代』 (1925) をすぐ思い浮かべる向きもあろう。

何かの現象や出来事、人の心気一転などの切っ掛け、引き金になった場所、基点を指して、一般に、あれがあそこが、～の「サターズミルだ」のように使えるだろう。

と言った具合に、固有名詞が何らかの深い関わりを持つ、それ故に含蓄に富む普通名詞と、その表現の類で、筆者が興味を抱くものの新たな一群、それが以下の「辞書」である。

[ア 行]

アーチャー・バンカー (Archie Bunker) [米・カナダ] 「高等教育を受けておらず、社会に対し頑固で独善的で保守的な反応をする労働者の典型人物」 / 「頑固で保守的な」 [形容詞] [1972]。1971年に放映された米国の連続テレビドラマ『家族みんな』 *All in the Family* の登場人物名より。“(Archie) Bunkerism” 「(アーチャー・バンカーのような人物の用いる) 間の抜けた教養のない言い回し」。

アニー・オウクリー (Annie Oakley) [米俗] 「(劇場、試合などの) 無料入場券 (free ticket)、招待券、フリーパス」 [c.1910] (単に Oakley ともいう)。転売防止のため銚子を入れた券が、射撃の名手として知られた米国の女性アニー・オウクリー (Phoebe Anne Oakley Mozee, 1860-1926) が標的として用い射抜いた穴だらけのトランプ札に似ていたことから。彼女は、米国の開拓者・興業師コウディ (William Frederick “Buffalo Bill” Cody, 1846-1917) が組織して欧米を巡回した“Buffalo

Bill's Wild West Show”(1885-1902)のスターであった。米国のテレビ番組 *Annie Oakley* 「アニーよ銃を取れ」(1954-57)がある。

イーノックアーデン (Enoch Arden) 「行方不明になって死んだと思われていたが実は生きていた人」[1864]。英国の詩人・桂冠詩人テニソン (Lord Alfred Tennyson, 1809-92) 作の物語詩 (1864) の標題でその主人公の名より。彼は海に出て難破し長らく帰らないので妻は幼な友だちと再婚する。やがて孤島から救出されて帰った彼は、彼らの幸福を見て死ぬまで自分の生還を人に知らせない。

イクシオンの火の車輪 (Ixion's wheel) 「果てしない責め苦に逢うこと」(GM)^③。ラピテス (Lapithae) 族の王で親族を殺害した最初の間イクシオンは、Heraの愛を求めたためにZeusに罰せられ、冥府 (Hades) の下の暗黒の深みタルタロス (Tartarus) で、永遠に回転する火の車輪に繋がれた。

イシュマエル (Ishmael) 「世の憎まれ [除け] 者」「排斥される者」「追放者」「社会の敵」[1835]。Abrahamが侍女Hagarに産ませた子。妻Sarahにより、母と共に荒野に追放された (『創世記』16:11)。米国の作家メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) の“Call me Ishmael”で始まる小説『白鯨』*Moby-Dick* (1851) の語り手。

「ウィアーイン、メレディス！」 (“We're in, Meredith!”) 「(閉店前などに) 入るのが間に合ったぞ！」[1907]。Fred Karno (Frederick John Westcott, 1866-1941の舞台名) の寸劇『廷吏』*The Bailiff* (1907) の助手の名から。

エヴェレスト (山) ([Mount] Everest) 「(人、物事の) 最高峰、頂点、最大の難関、(大きさ、量など) 莫大なもの」[1929]。ネパールと中国チベット自治区との国境にあるヒマラヤ山脈中の世界最高峰 (8,848 m)。英国隊が初登頂 (1953)。インドの測量に従事していた英国の測量技師エヴェレスト卿 (Sir George Everest, 1790-1866) の功績を讃えての命名。中国語名Jolmo Lungma (ヨモルンマ、珠穆朗馬)、チベット語名Chomo Lungma (チョモルンマ [国の女神の意])

エヴェレスト症候群 (Everest syndrome) 「山がそこにあるから、とといった困難への挑戦行動」「(議会で) 問題がそこにあるから、とやたらに〈Everest committee〉(問題調査委員会) を作ること」。

オーブリホール (Aubrey hole) 「イングランドのウィルトシャー州

ソールズベリー (Salisbury, Wiltshire) 平野にある〈ストーンヘンジ〉(Stonehenge [紀元前1700-1200年頃の巨大な環状列石から成る祭祀遺跡])の外輪に等間隔に並ぶ56の土壌の一つ」[1959]。これを発見した英国の古物収集家・伝記作家オーブリ (John Aubrey, 1626-97) の名に因む。

オブローモフ主義 (Obломovism) 「オブローモフ流生活」「怠惰」「無気力」[1902]。ゴーゴリ (Nikolai Vasil'eyich Gogol, 1809-52) の流れを汲むロシア・リアリズム作家の一人、イワン・ゴンチャロフ (Ivan Goncharov, 1812-91) の代表作の小説『オブローモフ』*Obломov* (1859) の、無為懶惰な徒食者である主人公名より。

[カ 行]

カエサルの妻 (Caesar's wife) 「疑惑を招くような行為があってはならない人」。シーザー [カエサル] (Gaius Julius Caesar, 100-44B.C. ローマの将軍、政治家) が、不義を疑われた妻 Pompeia を離別した時の言葉、“Caesar's wife must be above suspicion.” 「シーザーの妻たる者は疑惑を招いてはならない」から。

カノッサへ行く (go to Canossa/aller à Canossa [仏語]) 「謝る、詫びる、屈服する、へりくだる」[1600]。「カノッサ行」“der Gang nach Kanossa (Kanossagang)” 「恥を忍んで詫びにゆくこと」(独語)。「カノッサ」は北イタリアの村にある城。1077年に、ここに滞在中の教皇グレゴリオⅦ世 (1020?-85) の許へ神聖ローマ帝国皇帝ハインリヒⅣ世 (1056-1106) が、破門の赦免を乞いに行き、降りしきる雪の中を三日三晩立ち尽した故事より。ドイツの鉄血宰相ビスマルク (Otto Edward Leopold von Bismarck, 1815-98) が1872年5月14日議会で“Nach Kanossa gehen wir nicht.” (we are not going to Canossa.) と言ったのは有名。

カルタゴ人の信義 (fides Punica=Punic faith) 「(ローマ人がカルタゴ人の性質と見做したような) 裏切り、背信、変節」[c.1440]。ローマとカルタゴ (Carthage) との間には、結局、三回の戦争、ポエニ戦役 (Punic Wars) が行われて (264-41, 218-201, 149-46B.C.) カルタゴは壊滅、その地はローマに併合された。

キーモサーベ (kemo sabe, or kemosabe [ki:mou sá:bi] 「信頼できる人」。米国のトレンデル (G.W.Trendle, 1884-1972) が生み出した西部劇の主人公ローン・レインジャー (本名 John Reid) の物語は、

Clayton Moor 主演でTVドラマ化されたが、その *The Lone Ranger* (1949-57) の中で先住民の Torto がローン・レインジャーを指した呼び名。“Hey, Kemosabe, where're you going?” 「ねえ君、どこへ行くの」。ミシガン州の少年用キャンプ場の名に由来する。尚、主人公の愛馬へのかけ声 “Hi-yo, Silver!” は有名。

ギブソン ガール (Gibson girl) 「ギブソン流の美女」 [1901]。米国の画家ギブソン (Charles Dana Gibson, 1867-1944) の挿し絵にあるような1890年代の米国美人の典型。ハイネックでたっぷりした袖のシャツブラウスにロングスカート、肩幅が広くウエストの細いシルエット (cf. [I]46) が特徴。

ギャンプ (gamp) [英語] 「傘 (brolly)」 [1864]。Dickens 作の *Martin Chuzzlewit* (1843-44) 中の Mrs. Sarah Gamp の持ち歩くこもり傘に由来する。

キューピー (kewpie) [米・カナダ] 「キューピッド (Cupid) に似て丸々と太った翼のある幼児の姿の小妖精」 [1912]。米国の画家オニール (Rose O'Neill, 1870-1944) 作の Cupid の絵が基。イタリアの芸術家が Cupid を丸ぼちゃで翼を持つ姿に描いたことから。“Kewpie doll” (キューピー人形 [商標]) は、「可愛い [めかしこんだ、厚化粧の] 女性」を指す。

クォーク (quark [エース“ace”ともいう]) 「ハドロン (hadron [強く相互作用する素粒子のことで、フェルミ粒子 (fermion) である重粒子 (baryon) と、ボース粒子 (boson) である中間子 (meson) とに大別される]) を構成する仮説的構成粒子。重粒子は3箇のクォークから成り、中間子はクォークとその反粒子から成ると考えられる。スピン $\frac{1}{2}$ で、色 (color) とフレーバー (flavor) と呼ばれる自由度をもつ」 [1964]。ジョイス (James Joyce, 1882-1941) がその悪魔的小説『フィネガンズ・ウェイク』 *Finnegans Wake* (1936) の II, iv (London: Faber and Faber, 3rd. ed. p.383) で、“—Three quarks for Muster Mark!” 「^{マスター}将校マークのためにクォークを三唱！」なる句の中で造語したものを、米国の物理学者マレー・ゲルマン (Murray Gell-Mann, 1929-, ノーベル賞受賞1969年) が転用して命名した。お陰で、ジョイスの造語のままだったら殆ど知られずに終わっていたにちがいないこの語を知らない人は、今や存在しない筈である。詳しくは、知的興奮を掻き立ててやまない次の二著を参照されたい。

Murray Gell-Mann, *The Quark and the Jaguar: Adventures in the Simple and the complex*. Barnes & Noble, co. 1994. (野本陽代訳『クォークとジャガー たゆみなく進化する複雑系』草思社, 1997)。Leon Lederman with Dick Teresi, *The God Particle*. Houghton Mifflin, co. 1993. (高橋健次訳『神がつくった究極の素粒子』上・下, 草思社, 1997)。

グリナリーヤラリー (greenery-yallery) 「緑と黄の、緑と黄を好む」 「気取った」 「アールヌーヴォーの」 [形容詞] [1880]。アールヌーヴォーの緑と黄をシンボルカラーにしていた1880年代の唯美主義運動について言う。英国のユーモア詩人・劇作家ギルバート (Sir William Schwenck Gilbert, 1836-1911) の造語。彼の歌詞とサリヴァン (Sir Arthur Seymour Sullivan, 1842-1900) の作曲による共作喜歌劇 (『ミカド』 *The Mikado*, 1885, など) は “Gilbert and Sullivan operas” と呼ばれる。また、それらは、D'Oyly Carte Company が興業してロンドンの Strand にある「サヴォイ劇場」でよく演じられたので、“Savoy operas”ともいう。

コルベール主義 (Colbertism) [仏] 「国家の積極的介入、中央集権的特色を備えた経済政策」 [1961]。ルイ (Louis) XIV 世時代のフランスの政治家・財政総監コルベール (Jean Baptiste Colbert, 1619-83) の築いた政府主導型の重商主義政策から。

[サ 行]

サパタ髭 (Zapata mustache) 「口の両脇で急に垂れ下った口ひげ」 [1968]。映画『革命児サパタ』 *Viva Zapata!* (1952) で、米国の俳優 Marlon Brando が演じたサパタ (Emiliano Zapata, 1877? - 1919. メキシコの革命家、農地改革指導者、ゲリラ闘争指揮者 [1911-19]) が、この髭を生やしていたことから。ダンドリアリーズ (dundrearies = dundreary whiskers) なる「長い髯」 [1862] もある。 *Punch* 誌の主筆 (1874-80) を務め、70 篇にのぼる戯曲を書いた英国の劇作家トム・テイラー (Tom Taylor, 1817-80) 作の喜劇『我らがアメリカの従弟』 *Our American Cousin* (1858) の主人公ダンドレアリ卿 (Lord Dundreary) 役の俳優 Edward A. Sothorn のつけた頬ひげに因む。

日本語では、ドイツ皇帝ウィルヘルム II 世の髭のように先端の跳ね上った口ひげを「カイゼル髭」と呼んでいるが、英語に “Caesarean mustache” はないし、ドイツ語でもあの型の髭は、“Schnurrbart” [ひも +

ひげ]と称するだけのようだ。

口ひげ (髭, *mustache*)、頬ひげ (髯, *whiskers*) とくれば、均衡上、顎ひげ (鬚, *beard*) にも人名縁りの、例えば大変見事な鬚の持ち主だった英国の大劇作家バーナード・ショー (*George Bernard Shaw*, 1856-1950) に因んで “Shavian beard” 「ショー流鬚」とでもいう語が辞書に定着していると (実は無い!) ここでは都合がいいのだが。筆者には「ひげ」そのものに如何なるものにも別に興味があるわけではないが、“*mustache cup*” なる、「口ひげが濡れないように内側に髭支えが付いているカップ」[1886] まで存在する〈文化〉が大変面白い。

ジブラルタル (*Gibraltar*) 「難攻不落の地」 「堅固な要塞」 [1592]。スペイン南端の狭い半島にある *Rock of Gibraltar* を含む地域で英国の直轄領、地中海の要衝、面積5.8km²。現在は堅固な要塞で、その真下の湾は英国海軍の根拠地、軍港。アラビア語の *jabal al-Tariq* (タリクの山) が訛ったもの。711年にこの地を攻略したイスラム軍の指揮官 *Tariq ibn Zayid* に因む。「ジブラルタル海峡」 (*the Strait of Gibraltar*) は、ヨーロッパとアフリカに挟まれ、大西洋と地中海の境にある幅14~37kmの海峡。

ジブラルタルの岩山 (*the Rock of Gibraltar*) 「(口語) 信頼できる力を持つ人 [物]」 「堅忍不拔の人」 「堅牢なもの」 [1851]。スペイン南端に近い岬にある、ジブラルタルの殆ど全域を占める険しい岩山。高さ426m、長さ4km。単に *the Rock* ともいう。古名 *Calpe*。筆者も山の上まで訪れているが、人によく狎れた野生の猿が沢山保護されて我がもの顔に振る舞っていた。この山は二本ある「ヘラクレスの柱」 (*Pillars of Hercules*) [1581] のうちのヨーロッパ側のもの。アフリカ側のはモロッコ北西部、スペイン領 *Ceuta* にある山で「ジェベルムーサ」 (*the Jebel Musa*) と呼び (古名 *Abyla*)、高さ846m。

ジャバワキー (*jabberwocky*) 「(新造の) 訳の判らない言葉」 「意味不明のおしゃべり」 「意味のない戯文」 「ちんぷんかんぷん」 (*nonsense, gibberish*) [1871]。ルイス・キャロル (*Lewis Carroll*, 本名 *Charles Ludwidge Dodgson*, 1832-98) の造語。その作品『鏡の中のアリス』 *Through the Looking-Glass* (1871) の中の不可解な詩 *Jabberwocky* より。

ジャルナックの一撃 (*Coup de Jarnac*) 「思いがけない反[攻]撃」 「不意の痛撃」 「だまし打ち」。軍人のジャルナック (*Guy I^{er} Chabot de*

Jarnac, 1509-73以後)が、ラ・シャテニユレ (François Vivonne de La Châtaigneraie) と、アンリ II 世の宮中で決闘した際 (1547)、前者が後者の意表を衝いて膝裏を刺して倒した故事に依る。

ジョン・ブル (John Bull) 「典型的な英国人」 [1712]。スコットランドの諷刺作家・医師で Ann 女王の主治医であったアーバスノット (John Arbuthnot, 1667-1735) 作の五冊から成る冊子集『ジョン・ブルの歴史』*The History of John Bull* (1712) の主人公が、イギリス人の国民気質を表していたところから代表的な英国人を指す仇名となった。同様にアンクルサム (Uncle Sam) は「(擬人化された) 米国政府、米国民」 [1813] の意で、白い顎ひげを生やし、青の燕尾服に赤白の縞のズボンを穿き、星模様の帯の付いたシルクハットを被った長身瘦躯の男の姿で描かれる。イワン・イワノヴィチ (Ivan Ivanovi[t]ch) は、「善良だが怠け者の典型的なロシア人」を表すことも付記しておこう。

スキラとカリブデイスの間 (between Scylla and Charybdis) 「両難に挟まれて」「進退窮まって」「前門の虎、後門の狼」 [1547?]。Scylla は、イタリア南岸 Messina 海峡に突き出た岩で、現代名は Scilla。ギリシャ神話では「スキュラ」は、キルケー (Circe) によって海の怪物に姿を変えられたニンフで、船が Charybdis 「カリュブデイス」 (イタリアのシシリー島北東沖にあるメッシーナ海峡の渦巻。現代名は Galofalo) を避けて近づくと船乗りを取って食らったという。後世 Scylla 岩と同一視された。“fall from Scylla to Charybdis” 「一難去ってまた一難に遭う」。

スタンダール症候群 (Stendhal syndrome) 「外国の美術や文化に圧倒された旅行者の精神的混乱。時には自分が有名文人だと思い込んだりする」 [1979]。フランスの小説家・批評家スタンダール (本名 Marie Henri Beyle, 1783-1842) が1817年にフィレンツェ (=Florence) を訪れた際、サンタ・クロチェ大聖堂 (マキアヴェッリ、ミケランジェロ、ガリレオのような人々が埋葬されている) で、初めてジョットの有名なフレスコ壁画を見た時の有様を、1月22日の日記に次のように記していることから。「私はフローレンスにいるのだと思うと既に一種の恍惚状態に陥って、墓に詣でてきた偉人たちと親しい間柄のような気がした。これ以上美しいものはないと思いながらそれを近くから凝視し、殆ど手で触れんばかりにした。私は美術によって熱烈な感情を掻き立てられ、〈天上の感覚〉に出逢っている思いにまで到った。大聖堂を後にする時には、

私の心臓は早鐘のように動悸を打ったが、ベルリンでは神経異常と呼ばれているものに相違なかった。生命が私から汲み出されていった。私は倒れ込む恐怖を覚えながら歩いていった」— [Stendhal *Œuvres complètes*] *Rome, Naples et Florence*, Tome 1. Edio-Service S.A., Genève, p.325.

それから162年後の1979年に、フィレンツェのサンタ・マリア・ヌオヴォ病院の精神病科の主任だった Dr. Graziella Magherini が、当地を訪れる観光客の多くが数日間続く一時的な狂気のような発作に見舞われることに気付き、スタンダールが同種の症状に罹ったことを思い出して、この状態を「スタンダール症候群」と命名した。(cf. Googl 検索)

ソルフェリーノ (solferino) 「唐紅 (ローザニリン [rosaniline] から得られる顔料)」「帯紫鮮紅色」[c.1865]。この染料が Solferino (1859年にイタリア統一戦争での戦場となった Lombardy 州南東部の村) の戦いの直後に発見されたことに依る。cf. マジエンタ [II] 44.

[タ 行]

第五部隊 [第五列] (fifth column) 「敵と内通し国内で破壊行為をする、あるいは、敵軍の国内進撃を助ける裏切り行為をする一団の人々」[1936]。スペイン内乱中の1936年、Madrid 市の攻略を企図した Emilio Mola 将軍が四縦隊 (four columns) で進撃した時、同市内の Franco 将軍の隠れた第五縦隊がこれに同調して反逆すると公表されたことに依る。“fifth columnist”「第五部隊員、第五列員、裏切者、スパイ」。“fifth columnism”「第五列 [部隊] のような行動を取る主義」[1958]。cf. **sixth column** 「第六部隊、第六列」(自国に不利な流言を行ったりして fifth column を意識的・無意識的に助け、利敵行為をする人々、あるいは、第五列部隊に対抗するために団結した人々)。

ダニエル (Daniel) 「公式な名裁判官」。バイブルの旧約経外典 (Apocrypha) 「スザナ記」*The History of Susannah*, 「偶像ベルと龍」*The Idol Bel and the Dragon*, に登場する若い名裁判官から。Shakespeare, *The Merchant of Venice*, IV, i, 223. でポーシャの紛する判事を小躍りして讚えるシャイロックの科白、“A Daniel come to judgement! yea, a Daniel!”「ダニエル様のお裁きだ、全くダニエル様だ！」は余りにも有名。忽ち相手方の科白に逆転する巧妙さ、キリスト教徒への一種の胡散臭さ、シャイロックとユダヤ人種の口惜しさへの満腔の同情を掻き立てる、な

どの象徴にもなっている。

ダービーとジョーン (Darby and Joan) 「偕老同穴の夫婦」 「好一對の仲睦まじい老夫婦」 [1773]。1735年の *The Gentleman's Magazine* (1731年に英国の印刷・出版業者 Edward Cave [1691-1754] が Sylvanus Urban, Gent. の筆名で公刊した定期公刊物。1907年に廃刊) に掲載された Henry Sampson Woodfall (1739-1805) 作の物語詩中の主人公夫婦より。この二人は1730年没の Bartholomew 小路の John Darby と「雪花石膏に刻まれた絵のように純潔で、その胸に火を射込むよりシシリーの岩を動かすほうが易しいと思われる」妻、だとされている。相当するフランス語表現は “C'est saint Roch et son chien.” 「(聖ロックとその犬のように) 二人はいつも一緒だ」。

ダンディ・ディンモント (Dandie Dinmont) 「イギリス原産の小型テリア犬」 [1848]。スコット (Sir Walter Scott, 1771-1832) の小説 *Guy Mannering* (1815) に出てくる二匹のテリアを飼う農夫の名より。

ティンカーベル (Tinker Bell) 「なよなよした男」。バリー (James M. Barrie, 1860-1937) 作『ピーターパン』 *Peter Pan* (1904) の妖精の名から。cf.ピーターパン [I] 39。

ドロギュラス (drogulus) 「見たり触れたりして証明することは出来ないが、確かに存在するもの」 [1957]。20世紀の分析的な哲学の発展に貢献した英国の経験論哲学者エアー (Sir Alfred Jules Ayer, 1910-89) の造語。「私には drogulus が何かは述べられない、見たり触れたりできるようなものではないし、何らかの物質としての効果も及ぼさず、実体から分離した存在だから」。Edwards and Rap, *Modern Introduction in Philosophy*, 608.

ドナー隊 (The Donner Party) 「悲惨な目に遇う同行隊 (群、仲間)」。米国西部開拓史上最も悲惨な運命に遭遇した、ドナー一家をリーダーとする87名の一行から。1846年10月から翌年4月にかけて、カリフォルニアへ移住しようとしていて、途中の、その後ドナー峠 (The Donner Pass. 米国 California 州東部 Sierra Nevada 山脈中にある峠、標高2,161m) と呼ばれることになった所で大雪のために閉じ込められ、約半数が死に、残った者は死者の肉を食べて生き延びた。この事件は多くの史書や小説に取り上げられた。

ドナルドダック効果 (Donald Duck effect) 「宇宙飛行中に起こる音声

の高音化現象」[1953]。ディズニー (Walt Disney, 1901-66) のアニメ映画に登場するアヒルが、喉から絞り出すような声を挙げることから。cf. ミッキーマウスの項、及び、ディズニーランド [II] 49。

ドリーヴァーデン (Dolly Varden) 「19世紀後半に流行した婦人の衣装。ペティコートの上に着る Bodice と花模様の袋形の上スカート (panniers)、花飾り付きつば広帽子などから成る」[1872]。ディケンズ作 *Barnaby Rudge* (1841) に登場する美しく着飾った華やいだ娘に因んだ衣装から。“Dolly Varden Pattern”「ドリーヴァーデン柄、絹やローンにプリントされた花束模様」／“Dolly Varden trout (= bull trout)”「オシロコマ (カラフトイワナ)」。北米、東アジアの淡・海水に生棲するサケ科イワナ属の魚。上記の色彩の類似から魚に当て嵌められた。

服装の類には、固有名詞緑りの名称が少なくない。若干例を挙げる。プリンスアルバート (Prince Albert) 「ダブルの打ち合わせで丈の長いフロックコート」[1884]。Prince Albert (後の Edward VII 世, 1841-1910) が訪米の際流行させたのに因む。タルマ外套 (talma) 「19世紀に男女が着用したゆったりしたケープ、マント」[1852]。フランスの悲劇役者 F. J. Talma (1763-1826) から。レオタード (leotard) 「体操や軽業用またはバレエの練習時に着用する身体にぴったりの衣類」[1886]。フランスの空中曲芸師 Jules Léotard (1830-70) より。インヴァネス (inverness) 「長くゆったりしたケープ (Inverness cape) 付きコート」[二重回し] [1863]。スコットランドのネス河口 (mouth of the [river] Ness) の意のゲール語 (Gael) *Inbhirnis* から。ガリバルディ (Garibaldi) 「イタリア統一運動 (Risorgimento) に貢献したガリバルディ将軍 (Giuseppe Garibaldi, 1807-82) の軍兵着用の赤シャツをまねた19世紀半ばの婦人・子供用のゆったりしたブラウス」[1862]。フーヴァーエプロン (hoover apron) 「米国第31代大統領 (1929-33, 共和党) フーヴァー (Herbert Hoover, 1874-1964) が食糧庁長官であった時代に流行したワンピース風のエプロン、エプロンドレス」[1946]。

ドルの谷間 (Valley of the dolls) 「極度精神不安定」「興奮剤と鎮静剤を交互に服用しなければならない程の精神不安定状態」[1972]。米国の小説家ジャックリーン・スーザン (Jacqueline Susann, 1921-74) の同名の小説 (1966) より。

ドールトン方案 [式] (Dalton plan [system]) 「1920年に米国のパー

クハースト (Helen Parkhurst, 1887-1973) が初めて試みた教授方式で、生徒は能力に応じて一か年の学業を一か月分ずつ割り当てられ、それを各自が自発的に学習する」[1920]。Daltonはこの教育方式が最初に行われた高校の所在地 Massachusetts 州の町の名。

ドントペダロジイ (dontopedalogy) 「傍若無人 [いい加減] なことを言う性癖 [才能]」[1960]。英国現女王 Elizabeth II 世の夫君エディンバラ公 (Philip Mount-batten, Duke of Edinburgh, 1921-) の造語。語源、「歯+足」。cf. “put one’s foot in the [one’s] mouth”〔(米俗) へまなことを言う、言いしくじる〕。

ドンファン (Don Juan) 「遊蕩児、道楽者、女好きの男、女衞し、色事師、色魔」[1848]。14世紀頃のスペインの伝説的漁色家貴族 Don Juan Tenorio は、司令官の娘を犯し、彼女の父親を決闘で殺した。その墓前で死者を宴に招いたら死霊が彼の家を訪れ、彼を捕らえて地獄に引き摺っていったという。この物語をスペインの劇作家 Gabriel Tellez (筆名 Tirso de Molina, c. 1571-1648) が、『セヴィリアの誘惑者』*El Burlador de Seville* (*The Seducer of Seville*, 1630) の中で Don Juan 型の男を初めて創造して以来、モリエールの喜劇『ドン・ジュアン、もしくは石像の宴』(Molière [Jean-Baptiste Poquelin, 1622-73], *Don Juan ou le Festin de pierre* [1665初演])、モーツァルトの歌劇『ドン・ジョヴァンニ』(Wolfgang Amadeus Mozart [1756-91], *Don Giovanni* [1787]) などがある。

英国の文学作品としては、バイロン (George Gordon Byron, Lord, 1788-1824) の未完の諷刺叙事詩 *Don Juan* (1819-24)、ショー (G. B. Shaw, 1856-1950) の『人と超人』*Man and Superman* (1903)、ダンカン (Ronald Duncan, 1914-82) の三幕韻文劇 *Don Juan* (1953) など。

ドンファンと同意の語に、カサノヴァ (Casanova) [1888] がある。イタリアの文人、有名な漁色家で数奇な生涯を送り、『わが生涯の物語 (回想録)』*Histoire de ma vie* (12巻, 1791-98) の著者 Giovanni Jacopo Casanova (1725-98) の名から。『回想録』の現在の定本は、カサノヴァの直筆原稿を基にした1960年刊行のプロックハウス・プロン版。

同じように「道楽者」「放蕩者」「女たらし (libertine, rake)」の意で使われるラヴレイス (lovelace) [1751] は、英国の小説家リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) 作の書簡体小説 *Clarissa Harlowe*

(1747-48) の登場人物 Robert Lovelace より。

ドンファン症 (Don Juanism) 「男性にみられる、性的満足と征服に過度に専念する症候群」「男性の性欲異常亢進症、性欲抑制欠如」[1882]。「男子色情症」(Satyriasis) [1657] ともいう。女性の場合は、ニンフォマニア (nymphomania) [1775]。

[ナ 行]

ネストール (Nestor, 時に n-) 「賢明な老人」「長老」「大家」「第一人者」[1594-5] (GM)。ピュロス (Pylos) の王で、トロイ戦争 (Trojan War) におけるギリシャ軍の最も賢明な老顧問 Nestor の名から。

ノウジィ・パーカー (Nos[e]y Parker) 「(時々呼び掛けに用いて) 他人のことをうるさく聞きたがる人」「詮索好き」「おせっかい [焼き]」「ほじくり屋」「野次馬」[1907]。Canterbury 大主教を務めた英国の宗教家 Matthew Parker (1504-75) が語源だと言われるが未詳。“I’ve never met such a Nosy Parker as he is.” 「彼みたいなおせっかいにまだ会ったことない」。

ノスタルジャ (nostalgia) 「郷愁」「ホームシック (homesickness)」「懐旧の情 [念]」「里心」「それらを掻き立てるもの」[1770]。1668年にスイスの学者 Johannes Hofer が、ドイツ語の “Heimweh” を訳して造語したラテン語。

ノストラダムス (Nostradamus) 「易者 (soothsayer)」「予言者」「占い師」[1688]。フランスの医師・占星術師 Michel de Nostre-Dame (1503-66) のラテン語名から。彼の韻文で書いた予言集『諸世紀』*Prophéties (Les Centuries)*, 1555) は、出版後物議を醸し、1781年にはカトリック教会から非難された。

[ハ 行]

ハイゼンベルク効果 (Heisenberg effect) 「観察・記述の対象とされることによって対象そのものが本来の姿から変えられてしまうこと」[1968]。ドイツの理論物理学者で、量子力学の創始者、不確定性原理の確立者、ノーベル物理学賞 [1932] 受賞者 Werner Karl Heisenberg (1901-76) の名に因む。

「バーキスはそのつもり」 (“Barkis is willing”) 「(男が) 結婚の意志が

ある [を望む] 「～するつもりだ」 [1850]。ディケンズの小説『デイヴィッド・コパーフィールド』 *David Copperfield* (1849-50) の中で運送屋の Barkis が David に託して Peggotty に送った求婚の伝言から、「喜んで～したい」の意を表明する諺めいた表現となった。例えば、“I have nothing to do but to scribble, ‘Barkis is willing’.” (「喜んでそういたします」となぐり書きするより仕方ない)。

バギンズターン (Buggins’s turn) [英口語] 「業績よりも年功などによる (順ぐり) 昇進 [任命] 制」 「(能力主義ではない) 年功序列制」 [1901]。Buggins は漠然と不特定の人を指す。

パセティック・ファラシイ (pathetic fallacy) 「感情的虚偽」 「感傷的誤謬」 [1856]。自然・無生物などに人間の特性や感情を賦与すること。例。“the smiling skies” 「微笑む空」、 “the angry sea” 「怒れる海」。英国の美術批評家・社会改革家ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の造語。その名著 *Modern Painters* (1856) で初めて用いられた。

バーミューダ三角地帯 [水域] (Bermuda Triangle) 「物が消える [失くなる] とされる場所 [領域、分野]」 [1975]。バーミューダ諸島、フロリダ半島、プエルトリコ島を結ぶ三角海域。特に1940年代以後、船舶、航空機の不思議な遭難事故が多発している。Charles Berlitz (1914-2003)、*The Bermuda Triangle* (1974) より。「悪魔の三角形」 (Devil’s Triangle) とも言う。

パルティア撃ち (Parthian shot) 「(会話、口論の終りに浴びせる) 止めの言葉、捨てぜりふ、嫌みの一言」 「別れ際に残す辛辣な言辞」 [1902]。古代パルティア (紀元前1世紀にカスピ海東南にあった王国、226年にササン朝ペルシャに滅ぼされた) の騎兵が退却しながら、または、逃げるふりをしながら後ろ向きに矢を射かけた習慣から。パルティア人の矢 (Parthian shaft / la flèche du Parthe) ともいう。

ハンディアンディ (handyandy) 「(こまごました仕事を) 何でもする雇い人」 「雑役夫」 「小使い (handyman)」 「便利屋、何でも屋 (jack-of-all-trades)」 。アイルランドの民謡作者・小説家・画家ラヴァー (Samuel Lover, 1797-1868) 作 *Handy Andy* (1842) の主人公名に因む。

バンビ症候群 (Bambi syndrome) 「自然公園などで観光客がバンビを可愛いがるように動物に対して馴れ馴れしく接して時に襲われること」。オーストリアの小説家ザルテン (Felix Salten, 1869-1945) 作の同名の

動物物語 (1923) 及び Walt Disney の映画 (1942) の主人公の雄鹿の名から。バンビ効果 (Bambi effect) 「同性愛傾向の男子が異性愛に目覚めること [Bambi が友だちの Thumper と別れることから]」。

バンボッチャータ (bambocciata) 「17世紀にローマで製作された小形の風俗画」 [1816]。Rome でこのような絵を普及させたオランダ人の画家ファン・ラエル (Pieter van Laer, 1592-1645) の渾名 Bamboccio より。

ヒース・ロビンソン (Heath Robinson) [英] 「(機械・計画など) 単純なことを馬鹿馬鹿しい程手の込んだ仕掛け [手順、方法] で行う」 [形容詞] [1917]。英国の諷刺漫画家・挿絵画家 (William) Heath Robinson (1872-1944) の名より。cf. [米] Rube Goldberg [I] 32。

ピスガ展望 (a Pisgah sight [prospect, view]) 「(望んでいながら得られないものの) 遠くからの眺め [望見]」 [1650]。死海の北東にある古代モアブ (Moab) 王国 (現在のヨルダン国内) の山峰ピスガの山 (Mount Pisgah) の山頂 Mt. Nebo から、モーセ (Moses) が死の直前に「約束の地カナン」 Canaan を遠く眺めたという。「申命記」 3:27, 34:1-4。

ヒービージービーズ (heebiejeebies) [米・押韻合成語] 「(緊張・恐怖・心配などから来る) 極度の神経過敏状態」 「いらいら [びくびく] の状態 (jitters)」 「怖じ気 (willies)」 [1923]。米国の漫画家 W. Billy De Beck (1890-1942) の造語。“Just thinking about ghosts gives me the heebiejeebies” 「幽霊のことを考えただけで私は怖じ気づくのだ」。

ヒポクラテスの誓詞 (Hippocratic oath) 「医者としての実務に入ろうとする者が行う医者 of 意義・責任を具体的に述べる宣誓」 [1747]。古代ギリシャの名医ヒポクラテース (Hippocrates, “the Father of Medicine”, c.460-c.375B.C.) の名に因む。

ヒッポクレネー (Hippocrene) 「詩的靈感」 「詩想」 [1605] (GM)。翼をもつ天馬 Pegasus のひづめの一撃で湧出した Helicon 山の霊泉で、詩神 Muses に捧げられて詩的靈感の源とされた。

ピルジャリズム [ピルジャー式ジャーナリズム] (Pilgerism) 「都合のいい事実だけを選んだ左翼宣伝報道」 [1970]。オーストラリアの John Pilger の記事に対して英国の Auberon Waugh (1939-) が命名した。

フォークランド要因 (Falklands Factor) 「予期しない事件で政党支持率が高まる現象」 [1982]。1982年にフォークランド諸島 (南大西洋に位

置する約200の島から成る英領の群島)の領有をめぐり英国とアルゼンチンとの間に起った「フォークランド紛争」(the Falklands War)では英軍が勝利し領土を奪回した。そのせいで保守党が不人気から回復したことに因む。

プッシュミィプルユー (pushmipullyu) [米俗]「(押さば引くといい)綱引き関係」[1922]。英国生れの米国の児童文学者ロフティング (Hugh John Lofting, 1886-1947) 作 *Dr. Dolittle* シリーズ (1920-50) に出てくるラマ (llama) に似た前後に頭をもつ架空の動物の名より。

ブラッグダシオ (braggadocio) 「空自慢、大ぼら」「自慢屋、大言壮語する人」「空威張、横柄な態度」[1590]。英国の詩人スペンサー (Edmund Spenser, c.1552-99) の一大寓意詩『妖精の女王』*The Faerie Queene* (1590-96) BKs II、III、V に登場する自慢好きな人物 Braggadochio (brag [自慢する] + イタリア語の語尾。スペンサーの造語) の名に因む。他に「大ぼら (吹き)」の意の普通名詞となった人物として有名なのは、ドイツの狩猟家・軍人ミュンヒハウゼン [英語読みマンチョウゼン] 男爵 (Baron Munchausen, 1720-97) で、彼はドイツの鉱物学者ラスピ (Rudolph Erich Raspe, 1737-94) がメダル盗取の疑いから英国に逃亡して著した冒険譚『ミュンヒハウゼン男爵の途方もない旅とロシア戦役の物語』*Baron Münchhausen's Narrative of his Marvellous Travels and Campaigns in Russia* (1785) のモデルとなった。名詞の他に「奇抜な、奇想天外な、荒唐無稽な」[形容詞] [1854]。"Munchausenism"「ほら話、大ぼら」[1850]。

尚、「病気のふりをしたり自己誘導的に病気になって、入院・手術・治療を求める病的虚言症」を、ミュンヒハウゼン症候群 (Munchausen syndrome) [1951]と呼ぶ。この類いの種々の症候群を総称して"factitious disorder" (詐病) という。

プラトニックラヴ (Platonic love) 「(特に男女間の) 精神的 (恋) 愛」「肉欲を超越した愛」[1631]。／プラトン (Plato, 427-347B.C.) 哲学の愛、美のアイデアへの愛、理想主義的愛 (地上における肉体との結合を離れて、超越的な理想である真善美のアイデアとの結合に向かわせる動因、憧憬としての普遍的な愛)。

ブラマジェム (brummagem) 「見てくれだけの」「見かけ倒しの」「安ぴかの、偽の、まがいの」[形容詞] / 「安 [金] ぴか物」「まがいの」

[名詞] [1637]。イングランドの都市 Birmingham の俗称。もと、17世紀にバーミンガムで鑄造された偽造貨幣を暗に指した。

プリンス・チャーミング (Prince Charming, 時に p-, c-) 「(女性にとっての)理想の男性[恋人、求婚者]、シンデレラ物語の王子より」「女性にもてようと振舞う魅力的な男性」「プレイボーイ (ladies' man)」 [1855]。以前の *King Charming* に倣って究極的にはドーノア伯爵夫人 (Marie-Catherine Le Jumel de Barneville, comtesse d'Aulnoy, c.1650-1705) のお伽話『青い鳥』 *L'Oiseau Bleu* (1697) に出てくる主人公 Roi Charman (フランス語) の語順どおりの翻訳。

ブリンプ大佐 (Colonel Blimp) 「(軽蔑的) 初老の尊大な反動主義者 [特に職業軍人、役人について言う]」「頑固な保守的考えの人」 [1937]。英国の政治漫画家ロウ (Sir David Low, 1891-1963) の漫画の登場人物名から。

ブルーフロック (Prufrock) 「性的に抑圧され、内省的で決断を下せない男」 [1911]。『荒地』 *The Waste Land* (1922) の作者 T. S. Eliot (1888-1965) の初期の代表詩「J. アルフレッド・ブルーフロックの恋歌」 “The Love Song of J. Alfred Prufrock” (1910-11) の主人公より。分裂した二つの自我の間の欲求不満状態をラフォルグ (Jules Laforgue, 1860-87) 風の諷刺で描いた全131行の長詩。“Prufrock”は、エリオットの生地セントルイス (St. Louis, Missouri) の家具会社名から。

ブルボニズム (Bourbonism) 「(特に政治上の) 極端な保守 [反動] 主義」 [1884]。フランス (1589-1792, 1814-30) と、スペイン (1700-1931) と、ナポリ (1735-1806, 1815-60) を支配したブルボン王家 [朝] 流政治思想と組織の支持に由来する。

ブルワリズム (Boulwarism) 「団体交渉において経営者側が一方的に最終回答を行う方式」 [1963]。米国の General Electric 社で労務担当重役であった Lemuel R. Boulware (1895-1990) の名に因む。

ブレイの牧師 (Vicar of Bray) 「情勢に応じて主義主張を変える変節漢」「風見鶏」「日和見主義者 (timeserver)」。Henry VIII 世から Elizabeth I 世までの治政に、支配者が変わるたびに宗教界の転変に応じてその宗旨に合わせて新教へ旧教へと四度も転向したイングランドは Berkshire 州 Bray 村の教会区 (代理) 司祭のことを歌った18世紀の俗謡から。

ヘクター (hector) 「空威張りする人」「弱い者いじめする人」 / 「脅

しつける」「横柄に扱う」「弱い者いじめする (bully, browbeat)」「自・他動詞」[1655] (GM)。ホメロスの詩『イーリアス』に登場するトロイ戦争の勇士ヘクトール (Hector) に因む。Priam 王と Hecuba の長子で Andromache の夫であった彼は、この戦争で Patroclus を殺したため、その親友の Achilles に槍で突かれ、死体は戦車に結ばれ引き摺り回された。cf. ダモンとピュティアス [II] 49.

ペリオンをオサに積む (pile Pelion upon Ossa) 「困難に困難を重ねる」「不可能な難事に挑む」[1589] (GM)。巨人たちアロアダイ (Aloádae) が天に攀じ登ろうとしてオサ山 (ギリシャ北東部テッサリア地方にある、1,978m) の上にペリオン山 (ギリシャ東岸寄りの山でケンタウロスの住み処の一つ、1,600m) を重ね、それを更にオリュンポス山 (Olympus, ギリシャ北部の連山東端にある高峰、2,911m) の上に積み重ねたが無駄であったという神話から。『オデュッセイア』II, 315.

ボイコット (boycott) 「(人、商店、会社、国などを) 同盟排斥する」「(選挙、会議などへの) 参加を拒否する」「(不買同盟を結んで商品の) 販売 [扱い] を拒む」[動詞] / 「ボイコットすること」「共同排斥」[1880]。Norfolk 生れの退役軍人でアイルランドの土地差配人を務めたボイコット大尉 (Charles C. Boycott, 1832-97) の名に因む。1880年夏のアイルランド土地同盟の際、非暴力・合法の強制戦術が用いられて彼は苦しめられた。

ホークショー (hawkshaw) 「探偵、刑事 (detective)」[1888]。Tom Taylor (ダンドレアリーズの項参照) 作の劇 *The Ticket of Leave Man* (1863) 中の探偵の名 Hawkshaw より。

牧師補の卵 (curate's egg) 「看板倒れ」「玉石混淆と言われながら実は全く悪質なもの」「良い部分と悪い部分とがあるもの」[1905]。"Good in parts, like the curate's egg." 「牧師補の卵のように良い部分もある」という表現が諺のようになった。英国のユーモア週刊誌「パンチ」*Punch* の1895年11月9日号に載った諷刺画家・小説家デュ・モリエ (George Louis Palmella Busson du Maurier, 1834-96) の挿画 (本稿末尾) に基づく。「真物の謙遜」"TRUE HUMILITY" と題されたその画面では、司教の食卓で腐った卵を供され、司教から「悪くなっていなければいいんだがね」と言われた若い気弱そうな牧師補が事実を告げられずにももりどもり、「Parts of it are excellent!」「おいしいところもあります」と答え

ている。

[マ 行]

マギー＝ジグス症候群 (Maggie-Jiggs Syndrome) 「(通常の家庭内暴力とは逆に) 妻が夫に暴力を加える病的傾向」。米国の漫画 *Bringing up Father* 『親爺教育：ジグスとマギー』に登場する夫婦の名より。

マーク・タプリー (Mark Tapley) 「非常に陽気 [快活] な人」。Dickens の小説 *Martin Chuzzlewit* (1843-44) 中の、いつも上機嫌な、旅館「龍亭」“Dragon Inn”の召使いの名より。

マッカーシズム (McCarthyism) 「(特に反体制的・政治的批判を抑えるための) 不正な申し立て、取り調べの方法」[1950]。1950年代前半の米国でマッカーシー (Joseph Raymond McCarthy, 1909-57) 上院議員 (共和党) を中心とする保守勢力によるヒステリックな反共・赤狩り運動とその思想から。20世紀も半ば過ぎて米国で吹き荒れたこの非米活動調査委員会の「魔女狩り」嵐で、卓越した知識人が何人か自殺した。

マックレイク ([the] muckrake) 「醜聞漁り」「醜聞記事を載せる新聞・雑誌」「醜聞を暴く人、特に新聞記者 (= muckraker)」／「主に政・財界の汚職などを暴露する」[動詞] [1601] [1906]。米国第26代大統領 [1901-09、共和党、ノーベル平和賞1906] Theodore Roosevelt (1858-1919) の演説 (1906年4月14日) に由来し、20世紀初頭アメリカで有名になったジャーナリズム用語。原義は「堆肥を掻き集める熊手」。英国の説教師・作家バニヤン (John Bunyan, 1628-88) の名作寓意物語『天路歷程』*The Pilgrim's Progress (from this World to that which is to come)* (1678, 1684) の第2部で、現世の利益追求の象徴として描かれる人物 “a man with a muckrake in the hand” 「肥やし熊手を持った男」が出典。ルーズヴェルトはこれを転用して有名にした。“muckraking movement” 「米国の報道世界が各種の社会不正を暴露した著しい動き」。

尚、この大統領は、ウィーズル・ワーツ [鼯語] (weasle words) [1900] なる語も有名にした。「(逃げ口上に使う) 曖昧な言葉」「遠回しな (意味をぼかすための) 言葉」[米話]。鼯が鳥の卵の中身を、外観を殆ど損なわずに吸い取る習性を持つところ由来するという。1900年6月号の *Century Magazine* 誌所載の Stewart Chaplin (1859-1940) 作の物語「ステンドグラス政治信条」“Stained-Glass political Platform”で造語

された。「全くのところ、イタチ語とは、鼬が卵を吸い取って殻をそのまま残すように、近接の言葉言葉からその生命を吸い出してしまう言葉のこただ」と。それを Theodore Roosevelt が、St. Louis での1916年5月31日の演説で、時の第28代大統領 Woodrow Wilson (1856-1924) の用いた語を、原意が吸い取られた (sucked) 言葉だと辛辣に皮肉ったのだ。「国民として我々にある欠点の一つは、イタチ語と呼ばれてきたものを使う傾向にあるということだ。イタチが卵を吸うと中身が卵から吸い出されてしまう。こういう語を次々に使うと、その他の語からも何も残らなくなってしまう。……人は“universal” (広く、普遍的な) を修飾して程よくしようとして“voluntary” (進んで、自由意志で) と言ったりするが、これは鼬語を使っているということだ……」。教養のある為政者が羨ましい。合衆国では日和見政治家は、時々“a weasler”(鼬屋) と呼ばれる。

マーテンス擬態 (Mertensian mimicry) 「有毒動物が同種の無毒動物に外見を似せることで補食を容易にする擬態」[1977]。最初にこれを記載したドイツの爬虫類学者 Robert Mertens (1894-1975) より。cf. ミュラー型擬態、ベイツ擬態 [II] 42。

マーフィーの法則 (Murphy's Law) 「経験から生れた種々のユーモアに富む知恵。巧くゆきそうにないものは巧くゆかない、大抵の仕事は予想したより時間がかかる、など」「失敗の可能性があれば必ず失敗する (If something can go wrong, it will.) とか、壊れる [故障する] ものはいつか壊れる [故障する] というような滑稽な経験法則」[1958]。ソッドの法則 (Sod's Law) ともいう。米国の架空の人物 Murphy に因む。1950年代の米海軍の教育漫画に登場するへまばかりする機械工の名前、あるいは、Ed Murphy 米空軍大尉に因むとする説があるが、不詳。

マットとジェフ (Mutt and Jeff) 「のっぼとちびの二人組」「とんまな二人組」「とんまな会話」[1917]。米国の漫画家 H. C. Fisher (1885-1954) の漫画 *Mutt and Jeff* の登場人物の名から。

マムリウス (Mamurius) [ローマ伝説] 「為政者の災難を防ぎ、助力する巧智有能な技術者・職人」[2008]*。伝説上のローマ第2代の王 (715-673? B.C.) ヌマ (Numa Pompilius) のために、有名な聖盾「アーンキーレ (英語読み、アンサイリ)」(Ancile) の模造品を11箇作って盗賊が真物を見つけるのを防いだ鍛冶屋の名前に因む、として、本稿筆者が

「代称」「換称」(antonomasia, cf.[I] 53)に使いたくてここに挙げた。それが、*の意味である。

マルプロット (marplot [mar (損なう) + plot (計画)]) 「(余計なおせっかい、干渉をして) 計画などを壊す人」「ぶち壊し屋」[1708]。英国の劇作家サントリーヴル夫人 (Susannah Centlivre, 1667-1723) 作の軽い喜劇 *The Busy Body* (1708) 中の人物 Paul Pry に対して用いられた。“busybody” 「おせっかいな人」「世話焼き」。

マヨネーズ (mayonnaise) 「卵黄、サラダ油、酢、食塩などを混ぜて作ったサラダ用ソース」[1841]。〈仏. mayon. [フランス語での初出は1806]。おそらく Minorca 島 (地中海にあるスペイン領 Balears 諸島の一) 東部の町 Mahón の異形より。リシュリユー公爵 (Louis François Armand de Vignerot du Plessis, duc de, 1696-1788. 元帥) が、1756年 Mahón 港を攻め落とした時、食事を求めたが、調理してなく食べられる物を掻き混ぜて食べたことから。

マンブシマス (mumpsimus) 「(間違った言葉遣い、記憶、信念を) 頑として変えようとしないうこと」「頑固にしみついている誤謬」「因習的僻見」「間違いに固執する人」[1530]。ある無教養な牧師の話 (R. Pace, *De Fructu*, 1517, p. 80 にみえる) に因む。彼は儀式文集を朗読する時 “sumpsimus” と言うべきところを “mumpsimus” と言い誤り、間違いを指摘されたがそのまま押し通した。

ミッキーマウス (Mickey Mouse [m-, m-]) [米俗] 「つまらない [不必要な] もの」、[学生俗] 「楽な [ちよろい] 科目」 / 「つまらない、平凡な、古くさい」[形容詞] [c.1928]。Disney 製作の漫画映画の主人公のネズミの名から。

メタフィジカル・ポウエツツ (the metaphysical poets) 「形而上派詩人」[1779]。“Metaphysicals” [1425以前?]とも。ドライデン (John Dryden, 1631-1700) が『諷刺論』*Essay on Satire* (1693) でダン (John Donne, 1572-1631) を評して “He affects the metaphysics” 「彼は形而上学を愛好する」と言い、ジョンソン博士 (Samuel Johnson, 1709-84) がその著『詩人伝』*The Lives of the Poets* (10巻, 1779-81) におけるカウリー (Abraham Cowley, 1618-67) 論 (1779) の中で “The metaphysical poets are men of learning, and to show their learning was their whole endeavour” 「形而上派詩人は学識のある人々で、その学識を示すことが彼らの努力の全て

だった」と半ば嘲笑した言葉からの名称。

Donne 及び Cowley 他以下数名の17世紀英国詩人を指す。クリーヴランド (John Cle[i]veland, 1613-58)、マーヴェル (Andrew Marvell, 1621-78)、ハーバート (George Herbert, 1593-1633)、ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95)、クラショー (Richard Crashaw, ?1613-49) がその代表格である。技巧を駆使した譬喩や豊富な機知の使用など高度に知的・哲学的な詩のスタイルを特徴とした。20世紀になって、T. S. Eliot や新批評派の詩人・批評家によってその価値が新たに見直された。

メンター (mentor) 「立派な指導者」「信頼のおける助言者」「教師」[1750] (GM)。『オデュッセイア』に登場するメンートル (Mentor) に因む。彼はオデュッセウスの友人で忠実な助言者。オデュッセウスがトロイ出陣の際にはその子テレマコス (Telemachus) の世話と教育を托された優れた指導者である。

[ヤ 行]

ユダの接吻 (a Judas Kiss/baiser de Judas) 「偽りの口付け [友情]」「上辺だけの好意」「裏切り行為」[c.1400]。ユダがキリストの連行に一役買った際、本来親愛の情を表すべき接吻を逮捕の合図にしたことから。「マタイによる福音書」26・48。

ヨブ (Job [dʒɔʊb]) 「大きな苦難にじっと耐える人」。バイブルのウズ (Uz) の地の族長で、信心深く、神の種々の試練に堪えた正義の人 Job に因む。

ヨブの慰め手 (Job's comforter) 「(意図してまたは知らぬ間に) 慰めようとしながら却って相手の苦悩を深める人」「有難迷惑な好意の持ち主」[1738]。三人の友人が、病と災害に悩むヨブを慰めにきたが、その心ない言葉でかえってヨブを悲しませた故事から。「ヨブ記」16・2。

[ラ 行]

ラッドライト (luddite) 「機械化・自動化・進歩に強く反対する人」「産業改革 [技術革新] 反対者」／(L-) 「産業革命期 (1811-17年頃) に失業の元兇だと誤信して機械を打ち壊す暴動を起した英国の手工業 [労働] 者」[1811]。この思想の創始者とされるレスターシャ (Leicestershire) の織工 Ned Ludd の名に因む。“L[1]udditish”、“Luddism”[1812] (=

Ludditism 「ラッドライト主義、反機械化自動化主義」[1830] も。

ラムレットの抱擁 (baiser Lamourette) 「東の間の [一時的な] 和解」[1792]。フランス革命時の1792年、司祭・政治家ラムレット議員 (Antonine Adrien Lamourette, 1742-94) が立法議会で、左右両派を折り合わせる「ベゼ・ラムレット (baiser Lamourette)」と呼ばれる演説をして和解を取りつけたが、忽ち元の対立状態に戻った故事に依る。

リープフラウ [エン] ミルヒ (Liebfrau [en] milch) 「主にドイツ Hesse 地方で産出される白葡萄酒」[1833]。この葡萄酒が最初に作られた Worms 地方にある聖母マリアに捧げられた修道院 *Liebfrauenstift* の名に因む。修道院製の葡萄酒は多い。その代表として挙げておく。

ルーシー・ストウナー (Lucy Stoner) 「結婚後も未婚時代の姓 (maiden name) の引き継ぎを主張する既婚女性」[1949]。米国の婦人参政権論者・社会改良家ルーシー・ストウン (Lucy Stone, 1818-93) の名より。彼女は英国生れの米国の編集者・奴隷廃止論者・婦人参政権論者 Henry Brown Blackwell (1825? - 1909) の妻。

ルーズヴェルト系論 (Roosevelt Corollary) 「米国第26代大統領ルーズヴェルト (マックレイクの項参照) が1904年にドミニカ共和国への干渉に際して用いた〈モンロー主義〉(the Monroe Doctrine) * 拡大解釈の論理」[1904]。米大陸諸国が内政の不始末のためにヨーロッパ諸国から干渉を招く恐れのある時は、米国はそれらの諸国の政治に干渉することが出来ると主張した。* 米国第5代大統領 [1817-25] モンロー (James Monroe, 1758-1831) が、1823年12月2日の教書で表明した孤立主義外交の原則。米国はヨーロッパ諸国に干渉せず、また、ヨーロッパ諸国の西半球への植民と干渉に反対する、というもの。

ルビコン (川) (the Rubicon) 「(事を決する) 最後の一線」 「(のるかそるか) 決意のしどころ」[1626]。イタリアと Cisalpine Gaul (Alps 山脈の南東部) のカエサル管轄領域との境のこの川を、紀元前49年に Caesar が “Jacta est alea” (=The die is cast. 賽は投げられた) と言って渡り、ローマ政府の大権を握る Pompey との会戦を始めたことから。

“cross [pass] the Rubicon” 「後に引けない決定的な行動に出る」 「重大な決意をする」。

レオ詩体 (leonine verse) 「第12世紀のパリのサン＝ヴィクトル聖堂の参事会員 Leo (or Leoninus) が創始したラテン語の詩型」[1658]。本

来6詩脚、または5、6詩脚から成り各行の中間と終わりの語〔音節〕が押韻する詩型。例：*Daemon languebat, monachus tunc esse volebat*. 「悪魔が病気になった、それで修道僧になりたいと願った」。同一行または他の行の中間部と韻を踏む「中間韻」「Internal rhyme」の一種で、古くから知られてはいた。オウィディウス (Publius Ovidius Naso, 43B.C. - AD.18) の『愛の技巧』*Ars Amatoria*, I.59の“*Quot caelum **stellas**, tat habet tua Roma **puellas**.*”「天が星を持つ数だけ、それだけの乙女を汝のローマは持つ」、とか、ダラム (Durham) 大寺院にあるベータ (Beda, “Venerable Bede”, c. 673-735, ベネディクト会修道士、当時のヨーロッパ随一の学者といわれる) の墓碑銘“*Hac sunt in fossa, Bedae venerabilis ossa*.”「この墓には敬すべき Beda の骨あり」は有名。

英詩では一般に、一行の中間の音節と末尾の音節とが押韻する詩型をいう。例：Pepper is black, though it hath a good smack. 「胡椒は黒い、風味はいいが」。

ロウヴァ・ボーイ (Rover Boy) 「(うぶで未経験、些か世間知らずだが) 勇敢で節操のある人物」。米国の児童物語作家ストラテマイヤー (Edward Stratemeyer, 1862-1930) 作の少年物“Rover Boys Series (約30巻, 1899-1930)”の主人公の名から。cf. トム・スウィフト, [II] 48.

ロドモンテイド (rodomontade) 「大法螺」「大言壮語」「大風呂敷」「自慢話[屋]」[1612]。／「大法螺吹き (bragging)」、 「自慢する」[形容詞]／「法螺を吹く」「豪語する」「大風呂敷を広げる」[動詞]。イタリアの詩人ボイアルド (Matteo Maria Boiardo, 1441?-94) 作の騎士物語詩『恋するオルランド』*Orlando Innamorato* (未完, 1486) とその続篇としてアリオスト (Ludovico Ariosto, 1474-1533) が書いた長篇叙事詩『狂乱のオルランド』*Orlando Furioso* (1516) に登場する“Mars of Africa”と呼ばれる大言壮語の勇士、サラセンの首領ロドモンテ (Rodomonte) に由来する。

ロビンソンクルーソー (Robinson Crusoe) 「孤独な漂流者」「自給自足で独力で生きる人」[1768]。英国の作家ドゥフォー (Daniel Defoe, 1659?-1731) 作の小説『ロビンソン・クルーソー』*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe* (1719) の主人公から。彼は難船して28年2か月19日間無人島暮らしをした。最後の3年間一緒に過ごした忠僕のフライデー (Friday, 金曜日に出逢ったことからの命名)

は「忠実で有能な部下」の意になる。“crusoeing”[名詞]「孤独な[社会と無縁な]生活[を送ること]」。

ロビンフッド (Robin Hood) 「(ロビンフッドのような) 英雄・義賊」
「目を見張るような活躍をする人」「貧民に尽くす頼もしい人」[1377]。
弓術に長じその徒党 (Merry Men) と共に緑色の服を着て Sherwood Forest に住み、イギリスを侵略したノルマン人の貴族・金持などを襲って金品を奪い、土着のアングロサクソン系の貧しい人々に分け与えたとされる12世紀英国の伝説的英雄に因む。

[ワ 行]

ワシリーチェア (Wassily chair) 「ワシリー椅子」。1925年に、ハンガリーの建築家・家具デザイナー(1937年以降、米国在住)でパリの UNESCO 本部設計 (1958) 者マルセル・ブロイアー (Marcel Lajos Breuer, 1902-81) が設計したのでブロイアーチェア (Breuer chair) ともいうが、彼がこの椅子を、 Dessau (Dessau, ドイツの Berlin 南西方の都市) に1925-33年に置かれた市立総合造形学校バウハウス (Bauhaus) 構内にあるロシア生れの画家ワシリー・カンディンスキー (Wassily Kandinsky, 1866-1944) の家のためにデザインしたことに因む名称。ブロイヤーが1928年に設計した椅子には愛娘の名が付いていて、チェスカチェア (Cesca chair) という。

イタリアルネッサンス期の折り畳み椅子には、詩人ダンテの名が付くダンテチェア (Dante chair) があるし、サヴォナローラチェア (Savonarola chair) [1918] なる、何本かの曲がった脚がX形に交差して座部・背部・肘掛けを支えるルネッサンス時代の椅子もある。これは、イタリアのドミニコ会修道士で教会の改革運動を行って火刑に処せられた、あのサヴォナローラ (Girolamo Savonarola, 1452-98) の名に因む。19世紀初頭のエンペラー様式の肘掛無し小型脇椅子をヒッチコックチェア (Hitchcock chair) [c.1828] というが、これは米国の家具製作者 L.A. Hitchcock (1795-1852) の名から。

ヘップルホワイトチェア (Hepplewhite chair) は、英国の家具設計・製作者 George Hepplewhite (?-1876) に由来する。彼の名ヘップルホワイトは、1780-95年に英国で流行した繊細な美しさの特徴とする様式を表わす代名詞 [1897] となった。

Louis XV 様式を基調に多様なモチーフを取り入れた折衷様式をチッペンデイルというが、この英国の家具デザイナー Thomas Chippendale (1718? -79) 様式の家具は、椅子だけに限らず余りにも有名だ。昔、滯米中筆者は、博物館（の類）になっている文人・芸術家たちの生家や住んだ家、公開されている由緒ある家屋、邸をずい分訪ね回ったものだが、その都度しばしば、案内人や係の、多くは婦人方から、これはチッペンデイルだ、チッペンデイルだと、まるで自分の所持品でもあるみたいに大自慢されては、恐縮してみせるのに疲れたものだった。それにしても、椅子に、意匠考案者、製作者、愛用した著名人などの固有名詞付き名称のものが少なくないのは、彼らの日常が、腰かける生活、椅子の文化である証左でもあろう。

忘れられた人（世間から忘却された人）(forgotten man) 「1930年代の大恐慌の時、政府から当然の援助を受けられず無視された中産階級あるいは労働者階級の人々」[1925]。米国の経済・社会学者サムナー (William Graham Sumner, 1840 - 1910) の造語を、F.D. Roosevelt が1932年の大統領選挙で用いたことに由来する。既に観たように、この大統領が使用して定着させた語（句）は少なくない。

*

前二稿（[Ⅰ]、[Ⅱ]）と合わせてこれで三回に互り見てきたように、固有名詞ゆかりの普通名詞の面白さ・興味深さには、尽きないものがある。なかでも、自分が新たに造った語 [句、表現] が一般に普及して辞書に採用されたり、自らの造型した作中人物の性格や言動が普遍的な特質や様相を表すと広く認定されてそのまま普通名詞として使用されるようになるのは、詩人・作家にとって作者冥利の極みというものだろう。一連の本拙稿でも、それらを重視してきた所以である。

テレビも映画も未だ存在しない時代の或る挿話が有名である。田舎からロンドンに出てきて初めて念願のシェイクスピアの芝居を観た人物が、こう言ったという。

シェイクスピア、シェイクスピアというが、なんのことはない、諺ばかりから出来てるではないか、と。

事実はその逆で、シェイクスピアの創造した表現が人口に膾炙して、諺のようになってしまったのだ。

将棋界の鬼才として鳴らした故升田幸三元名人の座右銘は、「新手一生」だったという。この名棋士は、これまで誰も気付かなかった新しい絶妙手の発見を、生涯の希いとし続けたのである。これに倣って、遙かなる遠い日、筆者は密かに「新語一生」を我が座右銘の一つにしたものだったが、未だ実現に到らない。

最後に、ここにもう一語、戦争小説の名作『裸者と死者』*The Naked and the Dead* (1948) の著者、アメリカの作家ノーマン・メイラー (Norman Mailer, 1923-) が、華麗な写真を満載した、筆者の愛蔵本でもあるマリリン・モンロー (Marilyn Monroe, 1926-62) の伝記の中で造った新語を、加えておこう。

メイラーは言う。モンロー生前中に書かれた Maurice Zolotow 作の『モンロー伝』には、事実よりも多いものがあるが、それは、(語を新たに造り出したくてたまらない立場の連中に仲間入りするとして) factoids, つまり、雑誌や新聞に現れるまでは存在しない事実、嘘というよりは(声なき大衆)の中に操作して感情を生み出そうとする造りものだ、と。更に付加して、おそらく、リチャード・ニクソン (第37代米国大統領, 1969-74) が公の生活の間に語っていたのは factoids に他ならないとも。

…factoids (to join the hungry ranks of those who coin a word), that is, facts which have no existence before appearing in a magazin or newspaper, creations which are not so much lies as a product to manipulate emotion in the Silent Majority.(It is possible, for example, that Richard Nixson has spoken in nothing but factoids during his public life.) —*Marilyn: a biography by Norman Mailer pictures by the world's foremost photographes* (Alskog, Inc., 1973) p.18.

ファクトイド (factoid) 「(印刷・公刊されて一見事実らしく思われる) 類事実、擬似事実」 「事実として広く受け入れられている作り話」 「(根拠なしで) 事実とされている事件 [記事]」 / 「類事実の」 [形容詞] [1973]。Norman Mailer, *Marilyn* (1973) での造語。“fact”+“-oid” (…のような、…状の、類似の [物]、の意の形容詞・名詞を造る)。

因に、フランス語の“roquentin” 「ロカタン」は「若者ぶる老人」の意の普通名詞 (少し古い) であるが、サルトル (Jean-Paul Sartre, 1905

-85) の名作『嘔吐』*La Nausée* (1938) は、Antoine Roquentin なる人物の筆記帳から成るとされている作品である。もしサルトルが、この普通名詞から『嘔吐』の主人公を造型したのなら、本稿で取り上げた語彙群とは逆方向の動きを示すことになる。こういうのは、古くから寓意物語の作中人物造形の常套手法である。既成の普通名詞から、その意味内容を典型的に（そのまま、逆説的に、諷刺して、等種々に）表す豊かに肉付けされた人物（固有名詞）を造り出すのだから。

*

本「辞書」の一語に、「原子核を作っている陽子や中性子などの一群の素粒子の構成要素となっている粒子」を表す「クォーク」を採り上げたが、この造語者のジョイスは、小説の概念を一変した『ユリシーズ』*Ulysses* (1922) の作者でもある。この作品が世に出た同年には、詩の概念に一大変革を起した T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888-1965) の『荒地』*The Waste Land* (1922) も出版されたが、この詩人・批評家が使用して有名になったのが、次の文芸用語である。

客観的相関物 (objective correlative) 「読者の心に情緒を喚起するように具体化して描写された事物、状況、及び一連の事件」[1850]。例。エリオットの長詩「恋歌」(ブルーフロックの項参照) の51行目、「I have measured out my life with coffee spoons;」 「ぼくはぼくの人生をコーヒーの匙で量り尽した」。平凡な些事の反復で費す人生を具体的に表して、「退屈」 'boredom' という感情を喚起する。

1919年9月26日号の *Athenæum* 誌に発表した「*Hamlet* 論」でエリオットは、芸術という形で情緒を表現する唯一の方法は、「客観的相関物」を、即ち、「結局は感覚の経験になる筈の外面的事実が与えられると、直ちに喚び出される、あの特別な感情を生む型式となる一群の事物、情況、一連の出来事」を見い出すことによる、と書いた。

しかし、この用語自体の発明はエリオットに依るものではない。アメリカの画家・詩人で長く英国に住み、Coleridge, Southy, Wordsworth らと親交のあったワシントン・オールストン (Washington Allston, 1779-1843) によって、『芸術と詩に関する講話』*Lectures on Art and Poems* (1850) の中で初めて用いられたものだった。「空気、土、熱、水のような要素の度合や比率を可能な範囲で修正しても、一つの植物の特定の形

体を変えられないように、外界の世界も精神にとって同様だ。精神を表す必要条件として、精神の客観的相関物が必要なのだ」と。

エリオットの巧みな転用によって脚光を浴びた意味での「客観的相関物」、思うにその仲間入りが出来そうなものを集成したのが、一連の本拙稿の「辞書」になったのではあるまいか。そう希いたい。

補遺 本拙稿三部作の最初の部〔I〕51)に、カムストックぶり (comstockery) を収録した。この、アメリカの社会改革者・猥褻検閲家として蛮勇を振るった Anthony Comstock (1844-1915) は、1873年 “comstock law” の名で知られる不道徳文書取り締まり法案を議会に提出し、これを通過させ、同時に「悪徳抑制ニューヨーク協会」“New York Society for the Suppression of Vice” を設立、以来、不道徳文書の捜査・告発を熱心に敢行した。これがために3,000人に及ぶ人々が逮捕され、50トンの書物が破棄されたという。この活動の偏狭・狂信ぶりは編集者・批評家として令名高かった H. L. Mencken (1880-1956) らによって、文学者の自由を妨げるも甚だしいと攻撃された。

書籍の弾圧といえば、古代中国秦の始皇帝の焚書坑儒や、イタリアのドミニコ会説教僧サヴォナローラ（椅子の話柄の際に触れた）がフィレンツェのシニョリア広場で行った「虚栄の焼却」などが直ちに脳裡に浮かぶ。本を焼く所は遂に人も焼く（ハイネ [Heinrich Heine, 1797-1856] の名言*）のである。「人を焼く」ようなことのないように表現の自由は十分に護られねばならないが、そのためには、その自由の野放図を的確に自己抑制できる成熟が表現者の側に必須なこと、言うまでもなからう。少なくとも、他者の心を不当に傷つけたり名誉を毀損する表現の自由は存在しない筈だから。

* Das war ein Vorspiel nur, dort, wo man Bücher verbrennt, verbrennt man auch am Ende Menschen. 「焚書は序曲に過ぎない、書物が焼き払われるところでは遂に人間も焼き払われる。」
——*Almansor* 『アルマンゾル』（1823）

注

- ① 本稿は、本誌「成城文藝」第189号（2005年1月刊）の同題の拙稿（『中国関係論説資料』第48号第2分冊下に採録）（以後〔I〕と略記）と、同じ

く第194号（2006年3月刊）の同・続（『英語学論説資料』第40号に採録）（以後〔Ⅱ〕）に続くものである。

②この意味での文献初出年。

③ギリシャ神話、の意。

本稿執筆に当たってはOED初め下記の辞書類は改めて参照し、その中の辞句も利用させていただいた。

参照辞書（順不同）

The Oxford English Dictionary

Webster's Third New International Dictionary

Brewer's Dictionary of Phrase and Fable

『英米故事伝説辞典』（富山房）

『ランダムハウス英和大辞典』（小学館）

『新英和大辞典』第6版（研究社）

『研究社英米文学辞典』第3版

『小学館ロベール仏和大辞典』

『岩波哲学思想事典』

『国語大辞典』（小学館）



「牧師補の卵」